

飯山市埋蔵文化財調査報告書 第62集

# 南 條 遺 跡

MINAMI

JOU

SITE

飯山市道5-106号における特豪代行道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書



2000・3・15

長野県飯山市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は長野県飯山市大字旭西黒川5060-4ほかに所在する南條遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、飯山市道5-106号線における特豪代行道路改良工事に伴い、長野県飯山建設事務所より委託された飯山市（担当教育委員会生涯学習課）が実施した。
- 3 南條遺跡は、当初周知の埋蔵文化財包蔵地東源寺遺跡に近接していることから、東源寺遺跡として調査を実施したが、遺跡の主体が東源寺遺跡とやや距離をおいていること、近接して正行寺およびその前身として勝願寺が存在していたとされる場所であることことから将来混乱を招くと考え、集落名から「南條遺跡」として報告するものとし、今後も踏襲していくこととする。
- 4 調査は、平成11年5月に実施した確認調査をもとに、平成11年6月25日より同年8月26日まで実施した。なお、補遺調査として細部測量や空撮を9月13日まで実施した。
- 5 今回の調査で検出されたものは次のとおりである。

時代	遺構	遺物	備考
中 世	掘立柱建物址 5 縦穴遺構 1 井戸址 5 土坑 2	中・近世陶磁器・土器 金属製品・石製品・木製品	弥生式土器溜まり1 (本稿では未記載)

- 6 発掘調査にかかる組織は以下のとおりである。

発掘受託者	小山 邦武	(飯山市長)
調査主体者	清水 長雄	(飯山市教育委員会教育長)
事務局長	石澤 雄司	(飯山市教育委員会教育次長)
事務局次長	平野 英孝	(飯山市教育委員会生涯学習課長)
事務局	山室 茂孝	(飯山市教育委員会生涯学習課社会教育係長)
◇	伊達 信寿	(飯山市教育委員会生涯学習課社会教育係主査)
◇	望月 静雄	(飯山市教育委員会埋蔵文化財センター主査)
◇	藤沢 和枝	(飯山市埋蔵文化財センター職員)

調査団長 高橋 桂 (飯山市文化財保護審議会長)  
 調査担当者 望月 静雄

作業参加者（順不同・敬称略）

樋口栄・方場義秋・高橋喜久治・岩井伸夫・小沢キクエ・宮本鈴子・北川重機・  
高橋武・阿部智子・近藤とし子・丸山ケエ子・川口きみ江・小境雅彦・望月拓郎・  
藤沢和枝・小林正子・田村混城・小境雅彦

整理作業参加者

小林正子・藤沢和枝

- 7 報告書の作成は、望月静雄・小林正子・藤沢和枝が行い、陶磁器の一部実測は常盤井智行が行った。執筆は第Ⅵ章を高橋桂が、Ⅰ～Ⅴ章を望月静雄が行い、全体について高橋岡長が校閲した。
- 8 調査から整理作業にあたっては次の諸氏・機関よりご指導・ご協力をいただいた。記して御礼申し上げます。（順不同・敬称略）  
桐原健（長野県考古学会会長）・笹本正治（信州大学教授）・福島正樹（長野県立歴史館）・吉原佳市（木島平村教委）・南條区（丸山豊雄区長）・柳原地区公民館（柳莊一郎館長）・田中清見（飯山地区公民館長）
- 9 調査にかかる図面・遺物等は飯山市埋蔵文化財センターに保管している。

# 目 次

例言

目次

第1章	遺跡の位置と歴史的環境	1
第1節	遺跡の位置	1
第2節	歴史的環境	1
第3節	周辺遺跡	3
第2章	発掘調査	11
第1節	調査に至る経緯	11
第2節	調査経過	11
第3節	調査	12
第3章	遺構	16
第1節	I区	16
第2節	II区	25
第3節	III区	25
第4章	遺物	32
第1節	陶磁器	32
第2節	石製品・金属製品・木製品	36
第5章	成果と課題	49
第6章	まとめ	51

# 図 版 目 次

図1	南條遺跡の位置 (1:50,000)
図2	周辺遺跡分布図 (1:25,000)
図3	針湖遺跡遺構分布図 (1:1,500)
図4	北原遺跡鍛冶炉実測図 (1:40)
図5	小佐原遺跡回転縄文系土器 (1:2) (廣瀬1981)
図6	小佐原遺跡平安時代木棺墓 (1:40)
図7	南條遺跡調査地区地形図 (1:2,500)
図8	I区グリット設定図 (1:500)
図9	II・III区グリット設定図 (1:500)
図10	I区遺構全体図 (1:400)
図11	I区遺構分布図1 (1:160)
図12	I区遺構分布図2 (1:160)
図13	I区1号掘立柱建物址 (I-SB1) (1:100)
図14	I区2号掘立柱建物址 (I-SB2) (1:100)

- 図15 I区3号掘立柱建物址 (I-SB3) (1:100)  
 図16 I区1号井戸址 (I-SE1)・1・2号土坑 (I-SK1・2) (1:80)  
 図17 I×1・2号溝址 (I-SD1・2) (1:100)  
 図18 II区遺構分布図 (1:160)  
 図19 II区1号掘立柱建物址 (II-SB1) (1:100)  
 図20 III区遺構分布図 (1:160)  
 図21 III区1号掘立柱建物址 (III-SB1) (1:100)  
 図22 III区1・2・3号井戸址 (III-SE1・2・3) 凹地状竪穴遺構 (III-SK1) (1:40)  
 図23 出土陶磁器1 (1:4)  
 図24 出土陶磁器2 (1:4)  
 図25 出土陶磁器3 (1:4)  
 図26 出土陶器・土器 (1:4)  
 図27 出土石製品1 (1:4)  
 図28 出土石製品2 (1:4)  
 図29 出土石製品3 (1:4)  
 図30 出土金属製品1 鉄製品 (1:2)  
 図31 出土金属製品2 銅製品 石製品4 (2:3・1:3・2:3)  
 図32 出土木製品 (1:4)

## 表 目 次

- 表1 周辺遺跡地名表  
 表2 南條周辺の中～近世歴史年表  
 表3 陶磁器・土器観察表1  
 表4 陶磁器・土器観察表2  
 表5 陶磁器・土器観察表3

## 写 真 目 次

- PL1 南條遺跡上空より北を望む 南條遺跡並びに山門城  
 PL2 I区遺構空中写真1・2  
 PL3 II区遺構空中写真 III区遺構空中写真  
 PL4 I区調査区近景 調査状況 調査風景  
 PL5 1号土坑 2号土坑 1・2号溝址  
 PL6 1号井戸址調査状況 1号井戸址内樹木出土状況 1号井戸址  
 PL7 柱痕出土状況  
 PL8 柱痕出土状況 榫枿のおもり出土状況  
 PL9 II区 作業風景 全体写真

- PL10 1号掘立柱建物址内1号井戸址 井戸址排水作業
- PL11 Ⅲ区 全体写真 井戸址排水作業
- PL12 1号井戸址 2号井戸址 2号井戸址内珠洲系陶器出土状況
- PL13 中国陶磁 瀬戸・美濃陶器 肥前陶器
- PL14 肥前播鉢・内耳土器 珠洲系陶器 石製品
- PL15 小柄 硯 銅製容器 棹秤のおもり 柱痕

# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

## 第1節 遺跡の位置

南條遺跡は、長野県飯山市大字旭字西黒川5060-4番地ほかに所在する(図1)。旧行政区画では、下水内郡柳原村南條であり、昭和29(1954)年の合併により飯山市となっている。

千曲川が、信濃に残す最後の平が飯山盆地である。盆地底の標高が約320mを計り、東西に6km、南北に16kmの規模をもち紡錘形を呈している。盆地は千曲川によって東西に二分され、河東地区は木鳥平と呼ばれている。河西地区は、飯山有尾から常盤戸狩に向かって走る長峰丘陵によってさらに東西に二分されている。東側はかつての千曲川氾濫源の常盤平、西は広井川が形成した外様平が広がる。

外様平は、東の標高416mを最高峰とする低丘陵の長峰丘陵と、西の信越を分かち1000m内外の関田山脈によって画されており、東西1.5km、南北8kmの狭長な低地である。飯山市合併以前は、この外様平には南から柳原村、外様村、太田村が包括されていた。

さて、この外様平を仔細に観察すると、関田山系から流出する河川によって形成された扇状地と、谷状ならび低湿地が交互に展開しており、さらに、長峰丘陵と同成因とみられる小丘陵もいくつか点在している。

南条遺跡は外様平の南側を占める柳原地区南条区に所在し、長峰丘陵の西斜面から低地に至る個所に立地している。西側は広井川に接し、さらに西側には小丘があって、それに接して昭和63年開校の飯山市泉台小学校がある。南側は松山と呼ばれていた丘陵(現在削平されて存在せず)がある。さらには正行寺のある北側も小丘となっている。したがって、總体的には西の広井川に接し、周囲を小丘によって囲まれた凹地に立地しているといえる。

## 第2節 歴史的環境

遺跡の所在する南條は、応安三年(1370)に「水内郡常岩御牧南条内五ヶ村」および「水内郡常岩南条内後閑・水沢・有尾・中曾瀬」と古文書に記されるのを初見とする。ただし、このときには村名ではなく、常岩三条の内の一条である南条という地域を指しているものと思われる。南條が村名として現れるのは近世に入ってからである。しかしながら、この中世から近世にかけての南條は、数多くの伝承があるが明確な歴史事実というものはきわめて少ない。ここでは、飯山市誌歴史年表及び山崎盈氏「南条村の素盞鳴社と飯山町の祇園について」を参考にして南條周辺についての中世～近世はじめにかけての略年表を掲載する。

年号	西暦	出来事
文安四	1447	蓮如上人が親鸞聖人の遺跡を訪ねて、藤ノ木に立ち寄ると伝える。後に櫻御坊と呼ばれる。
天正六	1578	御館の乱 上杉景勝、武田勝頼と和睦。上杉景勝、岩井備中守・信能等に所領を宛がう。

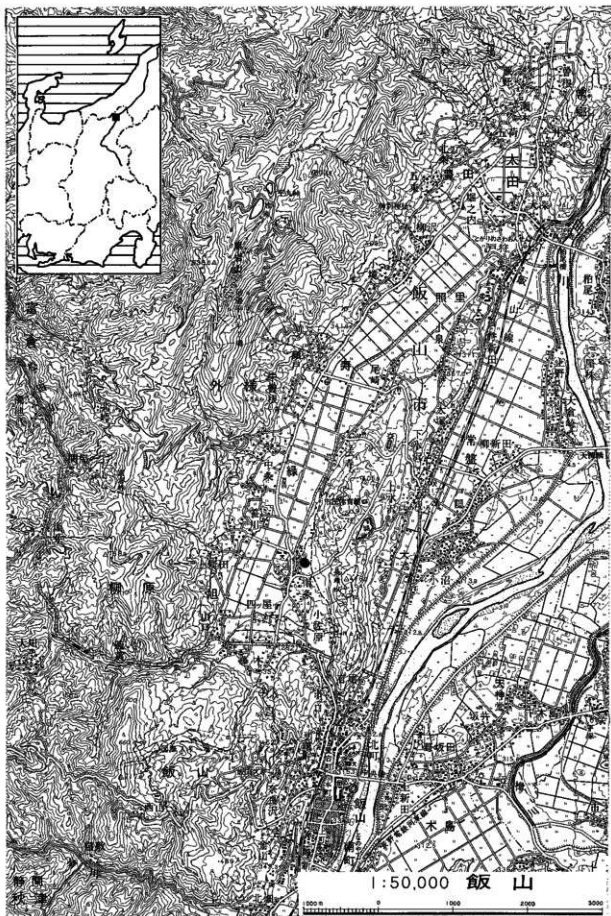


図1 南條遺跡の位置 (1:50,000)



天正九	1581	織田信長、勝願寺十六世善栄に信州南条において山林境内寺領を寄付し、これにより一寺建立という。
天正年間	1573～ 1592	山口城主岩井信能、南條素盞鳴社を祈願所とし、町の繁栄をはかったと伝えられる。また、天正十年岩井氏が飯山城代になるに伴ない、神輿を飯山城に担ぎ入れ、いつ頃か有尾八幡社に安置されたという。
慶長三	1598	上杉景勝会津移封。東源寺も移る（奥州信夫郡上名倉村 尾崎三郎左衛尉重誉）。
慶長五	1600	森忠政、勝願寺に寺領寄進。
慶長年間		関長門守が南条勝願寺の寺領を安堵。慶長3年・6年説あり。
慶長九		皆川代官佐久間勝之、勝願寺に寺領を寄進。
元和元	1615	勝願寺、松平忠輝の招請に応じて高田の出雲町に移る。南條は通寺となる。
元和年中	1615～23	城内にあった神輿が、有尾八幡社に移される。
正保年中	1645前後	南條正行寺開貞開基
慶安二	1649	南条・笹川・山口・四ッ屋・藤野木・大川村で検地。

表2 南條周辺の中～近世歴史年表

この他にも、いろいろな伝承もあるが矛盾が生じてくるために割愛した。

これらの事実や伝承から、中世末から近世にかけての南條は山口城主岩井氏の祈願社ともなった素盞鳴社があったり、勝願寺が存在していたりかなり町として繁栄していたと推定される。特に、勝願寺は今回の発掘地の北側にある正行寺の前身であることが間違いないところであり、今回の発掘地はその勝願寺門前に位置することとなる。

### 第3節 周辺遺跡

本稿では、南条遺跡に近接した遺跡のみについて触れることとする（図2・表1）。

#### 1 (仮称) 正行寺北遺跡 (6)

昭和60年の詳細分布調査によって発見された遺跡である。長峰丘陵裾部であるが、やや小高くなっており独立した丘陵状を呈している。西側は広井川が丘陵崖下を流れる。詳細は不明であるが、遺物は縄文時代各期にわたるものと思われるが、表面踏査では縄文前期土器を主体としているようである。また、北側の低地にも遺物の散布が認められる。

#### 2 針湖池遺跡 (10)

古くから知られている遺跡である。旧石器時代の石器片、縄文時代表裏縄文土器・押型土器・前期前半土器、弥生時代栗林・箱清水式土器、平安時代土師器・須恵器などが報告されている。

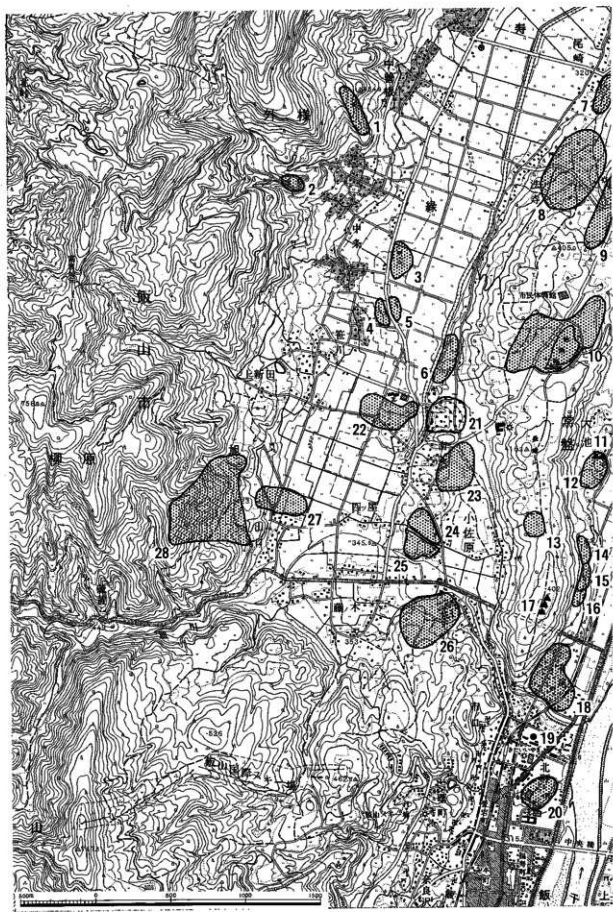


图2 周辺遺跡分布图 (1:25,000)

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生		古墳			奈良・平安	中世	備考 (発掘調査年・特記事項)	
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	中期	後期	前期	中期				後期
1	中条城														○	
2	馬の峯城														○	
3	布施田														○	
4	別府原				●								●	●		S43調査
5	笹川				○											
6	正行寺北		○											○		
7	山崎							●	●							S33調査
8	法寺							○	○							
9	西長峰							●	●							S25調査
10	針湖池	○	○	○	○	●		○	●					○		H9. 10調査
11	大池古墳群													○		
12	お茶屋				○											
13	(仮)長峰	○														
14	長者窪			○				○						○		
15	林子畑										○			○		
16	黄金石上													●		S38調査
17	有尾古墳群										○			○		
18	有尾	●		●	●			●	●	●	●	●	●	●	●	S24. 27. 35. 62調査
19	北町							●								S58調査
20	飯山城跡	○													●	H4調査・飯山藩主居城
21	南条				●				●						●	H11調査
22	北原							●	●					●	●	S53. 56. 58. 59調査・平安期鍛冶炉
23	東源寺	○													○	
24	鬼ヶ峰								○					○		
25	小佐原		●					●	●							S44調査・表裏縄文・平安木棺墓
26	須多ヶ峰			●	●			●	●	●						S40. 41. 45. 86調査・方形周溝墓
27	鍛冶田		●					●						●	●	S54調査
28	山口城														○	

表1 周辺遺跡地名表

平成10年、多目的運動広場造成に際して発掘調査が実施された(図3)。その結果、縄文時代後期と推定される落し穴(Tピットおよび長方形土坑)が計49基検出された。また、別の地点から弥生時代後期の円形・方形各周溝墓が計4基検出されている。落し穴は東の針湖池に続いており、また西斜面下にも続くと思われることから、正行寺北遺跡との関連も想定されるところである。

### 3 鶴巻遺跡

すでに消滅してしまった遺跡であるが、南條遺跡(21)と東源寺遺跡(23)との間の円形の小丘上より旧石器時代の石器片がかつて採集されている。

### 4 東源寺遺跡(23)

字名から冠した遺跡名であり、その名のとおりかつて東源寺があった場所といわれている。東源寺は、文明8年(1476)に尾崎政重が隠居した寺で、当初太田五東に建てられたとされ、その後南条に移されたといわれる寺である。その後上杉氏にしたがって会津・米沢に移されて、現在は米沢に現存している。南条東源寺の地字は広大な面積を有しており、寺跡の場所は現在も不明であるが、この地籍内より珠洲焼片が採集されており、東源寺跡の存在もほぼたしかと思われる。

### 5 北原遺跡(22)

現在の飯山市立泉台小学校敷地から南側の微高地にかけて存在する。昭和53年の県営圃場整備事業並びに同58・59年の統合小学校(泉台小学校)建設に際して発掘調査が行われた(図4)。その結果、平安時代の鍛冶炉址群を中心とした遺構が発見された。その状況から専門的な鍛冶集団による作業場の可能性がある。

### 5 小佐原遺跡(24)

縄文時代草創期から早期にかけての表裏縄文土器で著名な遺跡である(図5)。また、弥生時代後期の竪穴住居址1軒も昭和44年の発掘調査で検出されている。

なお、平成2年には農村総合モデル事業農村環境改善センター建設に際して発掘調査が行なわれ、平安時代の木棺墓1基を検出し、供献品として灰釉陶器長頸瓶1、小瓶1、黒色土器4が坑底に置かれていた(図6)。掘り方も長径2mを数え、木棺に打付けてあったと考えられる鉄釘も発見されていることから、かなりの有力者の墓だろうと推定されている。

### 6 鬼が峰遺跡(24)

小佐原遺跡と同一の丘陵に存在しており、南側を小佐原遺跡、北半を鬼が峰遺跡としている。时期的な隔りがあることから分離したと思われるが、埋蔵文化財包蔵地としては、通称鬼が峰の丘陵全体を遺跡として捉えている。

鬼が峰遺跡は、平安時代の散布地として登録されている。

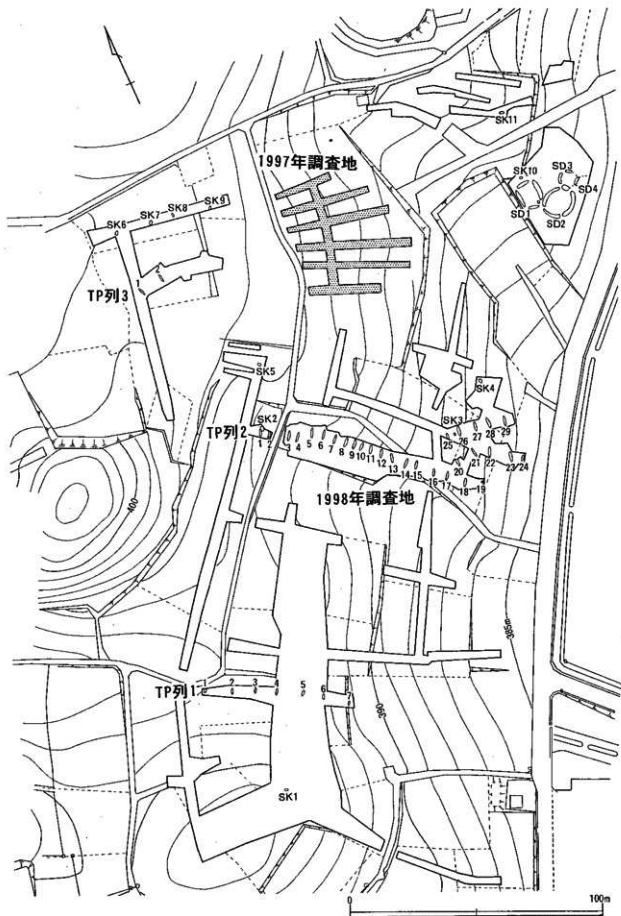


图3 針湖遺跡遺構分布图 (1:1,500)

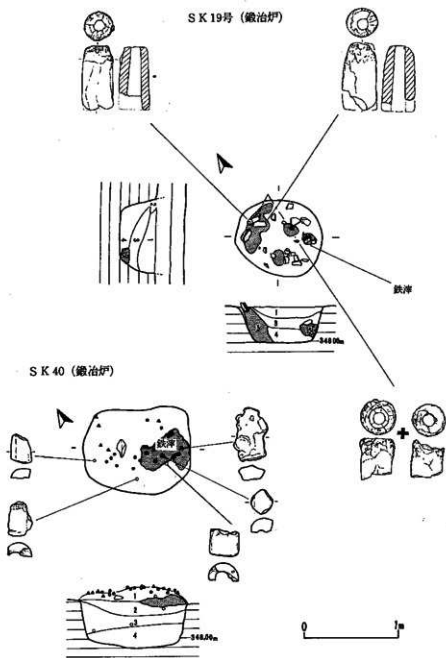


图4 北原遺跡除鍛冶炉実測图 (1:40)

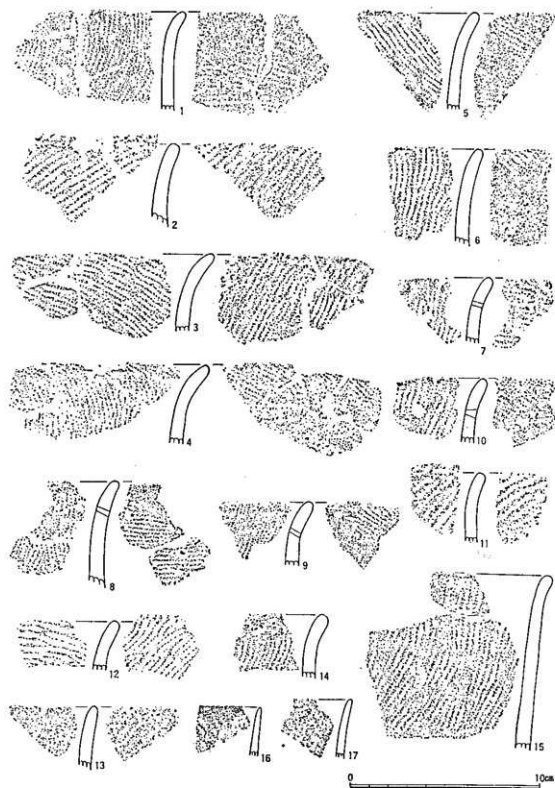


图5 小佐原遺跡回転繩文系土器 (1:2) (廣瀬1981)

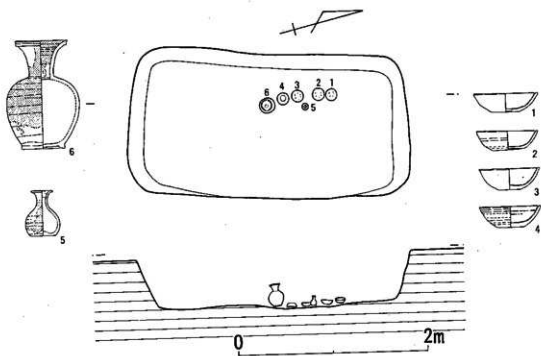


图6 小佐原遺跡平安時代木管墓 (1:40)



## 第2章 発掘調査

### 第1節 調査に至る経緯

平成10年、県教育委員会による「平成11年度公共事業等に係る埋蔵文化財の調査について」の照会により、長野県飯山建設事務所より飯山市柳原地区南条において道路改良の予定が提出された。飯山市教育委員会整備の遺跡分布図では、対象個所に近接して東源寺遺跡が存在していた。そのため、県教委・専門家を交えて協議する必要があると判断し、7月23日付で県教育委員会文化財保護課長宛提出した。

同年月日

平成11年1月13日 建設事務所より試掘調査の積算の依頼受け、試掘面積300㎡、予算を853,000円とした。

同年4月12日 飯山建設事務所長と飯山市長との間で「飯山市道5-106号における特豪代行道路改良事業に係わる埋蔵文化財発掘調査委託」契約書を締結した。

同年5月26日から5月31日まで試掘調査を行なう。その結果、対象内3箇所から遺構・遺物が確認され、本発掘の必要性が生じた。このことについて、6月4日付で完了報告書を建設事務所に提出し、約1600㎡を対象として2ヶ月間の発掘調査の必要を報告した。

6月16日 飯山建設事務所長と飯山市長との間で「飯山市道5-106号における特豪代行道路改良事業に係わる埋蔵文化財発掘調査委託」契約書が締結され、さらに、7月21日付で変更契約が締結された。調査面積は1000㎡以上、予算額は5,695,000円、調査は飯山市教育委員会が行うこととした。

### 第2節 調査経過

調査日誌抄

- 6月17日 夜、南条公民館において地元説明会開催。南条区長・地区公民館長・活性化センター企画員・地権者等出席。
- 25日 発掘調査の開始に伴い調査開始式を開催。調査開始。
- 28日 調査対象地内を走る通称法寺街道の東側を3区として調査に入る。遺物・遺構僅かに出土する。
- 29日 II区精査。グリット設定。
- 30日 日中は晴れたが、朝豪雨のため中止。全国的に集中豪雨で各地区被害あり。
- 7月1日 10時40分頃雨のため一次中止決定。午後再開。I区水中ポンプにより排水作業。  
II区ジョレンにより精査。1棟の建物址確認。また、井戸と思われる土坑も確認。柱穴調査開始。
- 2日 I区排水作業。II区柱穴調査続行。ほぼ完掘。
- 5日 降雨のため足場が悪くIII区に入る。III区のグリット設定。
- 7日 III区続行。遺構明確に確認できず。II区柱穴調査。

- 8日 I区排水のため設定した溝の残土処理作業。グリットを設定する。工用センター杭No4からセンター杭を見通して4mグリットとした。ジョレンがけに入る。
- 9日 I区グリット設定継続。完了。I区調査に入る。
- 13日 I区降雨のため足元が悪く3区に入る。柱穴と思われる遺構掘り下げ。2×3間と思われる建物址調査。B-4検出の土坑井戸址の可能性あり、青磁出土。SK1とする。B-3区も同様に井戸址か。SK2とする。
- 14日 III区SE1・3を中心に調査。SK3の確認面より5cm下位から珠洲焼甕片出土。45cm下位中央より珠洲焼片口鉢片出土。  
午後、I区西端より調査再開。中世の褐色柱穴を5cmだけ掘り下げる。弥生土器片集中個所があり、複合して判別が難しい。
- 23日 II区全体写真撮影のため清掃。II区の井戸址掘り下げ完了。木製品等出土。
- 26日 II区全体清掃。全体写真撮影。III区平板測量。
- 27日 III区平板測量続行。レベル着手。I区精査。
- 8月2日 I区柱穴掘り下げ続行。
- 3日 午後4時より現地一般公開開催。約100名参加。
- 12日 I区柱穴掘り下げ続行。
- 13日～17日 休み
- 18日 調査再開
- 26日 調査終了式
- 30日 遺構空撮実施
- 9月13日 補充調査完了

### 第3節 調査

対象地は畑の中に新設される道路で、本調査に先立つ試掘調査により、対象地において3箇所遺跡の存在が確認されていた。そのため、I～III区に分けて調査を実施することとし、グリットの設定も各区ごとに行うこととした(図7)。I区は市道5-320号脇の道路センター杭からKA1-2センター杭を見とおして設定した(図8)。グリットは4mである。II区は幅杭からセンター杭を見通して設定した(図9) III区は、市道1-210号線上に位置しているセンター杭から直近のセンター杭を見とおしてグリットを設定した(図9)。いずれも4mグリットである。

表土は、バックホーにより除去することとし、残土は調査区内の遺構の認められない個所にまとめることとした。

なお、II区はやや微高地で水はけも良かったが、I区並びにIII区は水はけが悪く天候の不順なこともあり、水中ポンプを常備しながらの調査であった。

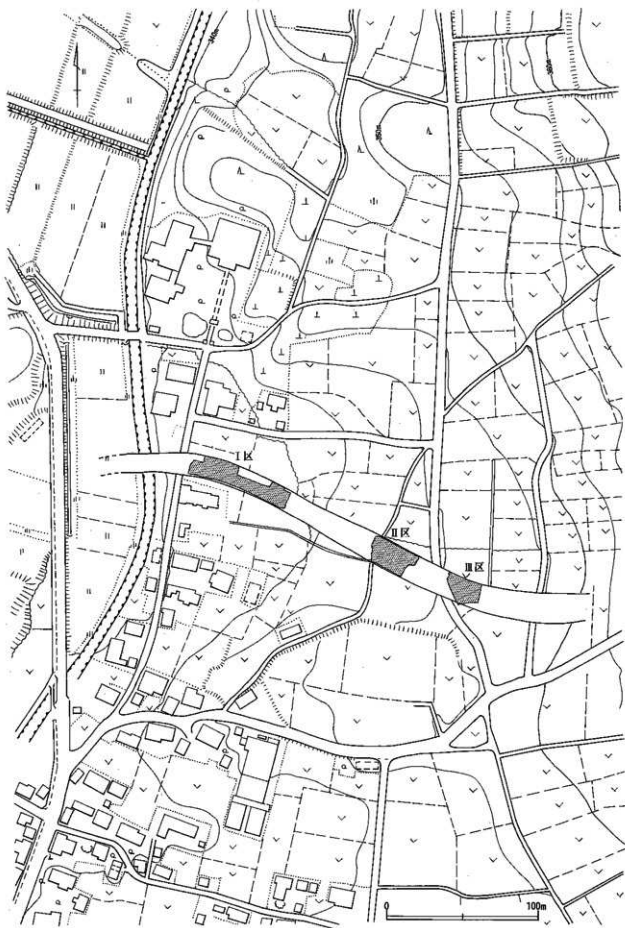


图7 南条道路调查地区地形图 (1:2,500)

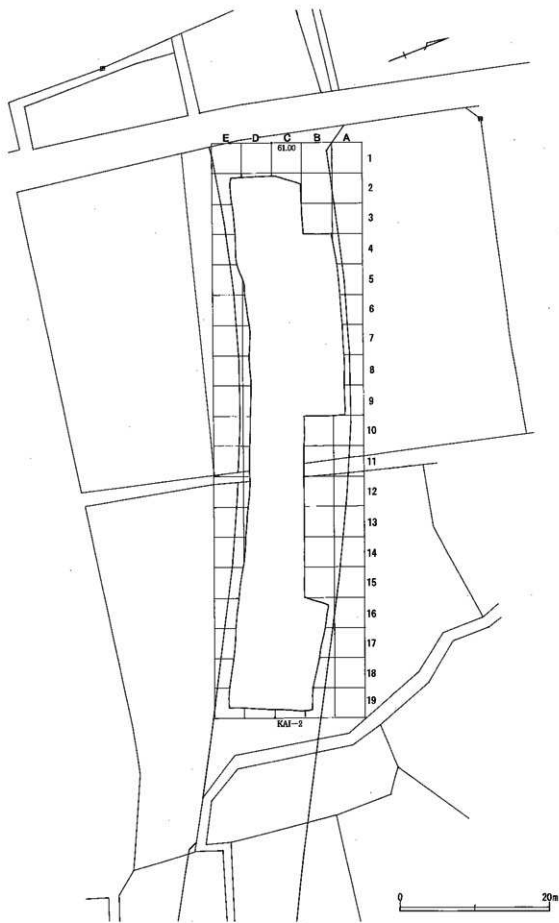


図8 I区グリッド設定図 (1:500)

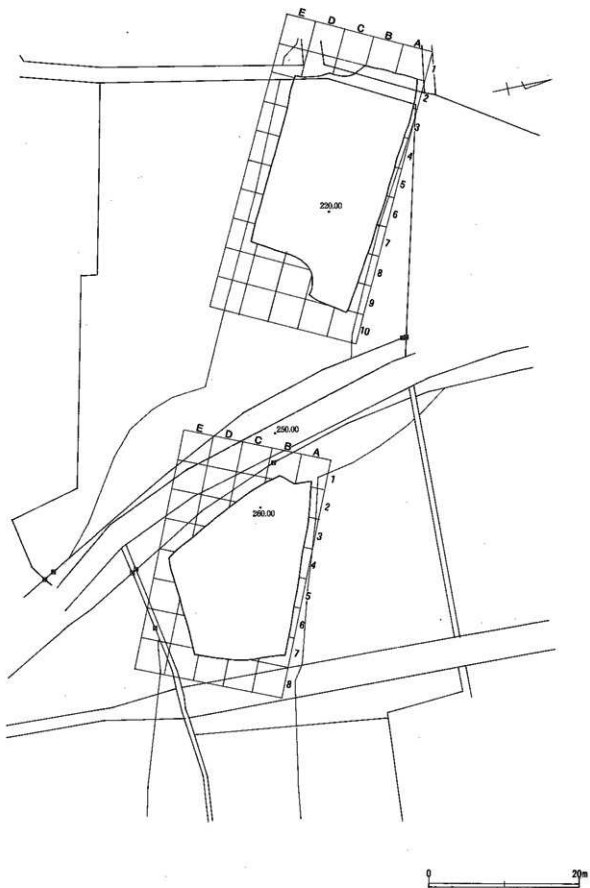


図9 II・III区グリッド設定図 (1:500)

# 第3章 遺構

## 第1節 I区

検出された遺構は、掘立柱建物址3、竪穴遺構1、井戸址1、土坑2である(図10~12)。建物址は3棟以上あるものと思われるが、雨水が長期間溜まっていたために遺構が崩れたりしたために明確にし得なかった。

### 第1号掘立柱建物址(I-SB1)(図11・13)

B~D-4・5に位置する。径1m前後、深さ60cmの柱穴で、建物の柱穴とするにはかなり大きい。また、柱間寸法も桁行2.5mから4m、梁行5.4mを計る。規模は4間×1間と細長い。規模や柱間寸法からも建物とするにはやや躊躇するが、周辺の柱穴とは大きさが歴然と異なり、また直線的に延びることから一軒建物として捉えておく。P1からは硯や石造品が出土している。

### 第2号掘立柱建物址(I-SB2)(図11・14)

B-5~8に位置する。建替えもしくは重複している可能性があるが、本稿では一軒の建物として報告する。規模は4間×1間で、柱間寸法は桁行2~2.2m、梁行3.8mを計る。

### 第3号掘立柱建物址(I-SB3)(図11・15)

D-6~8に位置する。調査区外に延びると推定されるために規模は不明であるが、4間×1間もしくは5間×1間と推定される。本建物址柱穴の4箇所から柱痕が検出されている。

### 1号井戸址(I-SE1)(図11・16)

C-9区に位置する。ほぼ円形の平面プランをもち、径は約2.30mを計る。急斜で掘り込まれており、特別な施設は認められない。深さは約4.5mまで掘り下げたが、湧水があり壁が崩れて危険であったためにそれ以上の調査を断念した。覆土中に自然木が大量に薙げこまれたような状況で検出されている。

### 1号土坑(I-SK1)(図11・16)

C-2区に位置する。3.50mのやや不整であるが、いわゆる方形竪穴と称される遺構に類似する。壁はほぼ垂直に立ちあがり坑底もほぼ平坦である。東壁及び南周辺にピットが認められるが、東壁ピットは时期的に新しく、南周辺のピットも関係するかどうかは不明である。

覆土中より、中国磁器、珠洲系陶器、瀬戸・美濃系陶磁器、棹秤のおもりなど数多くの遺物が出土している。

### 2号土坑(I-SK2)(図11・16)

C-16に位置する。2.8×1.5mの楕円形を呈し、深さは32cmを計る。覆土中には人頭大の礫や拳大の礫が坑底にずり落ちるように入り込んでいる。壁は比較的急斜である。遺物で

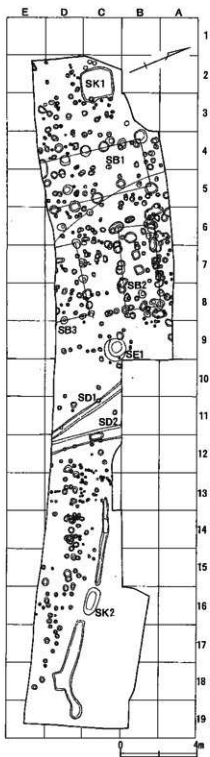


图10 I区遗構全体图 (1:400)

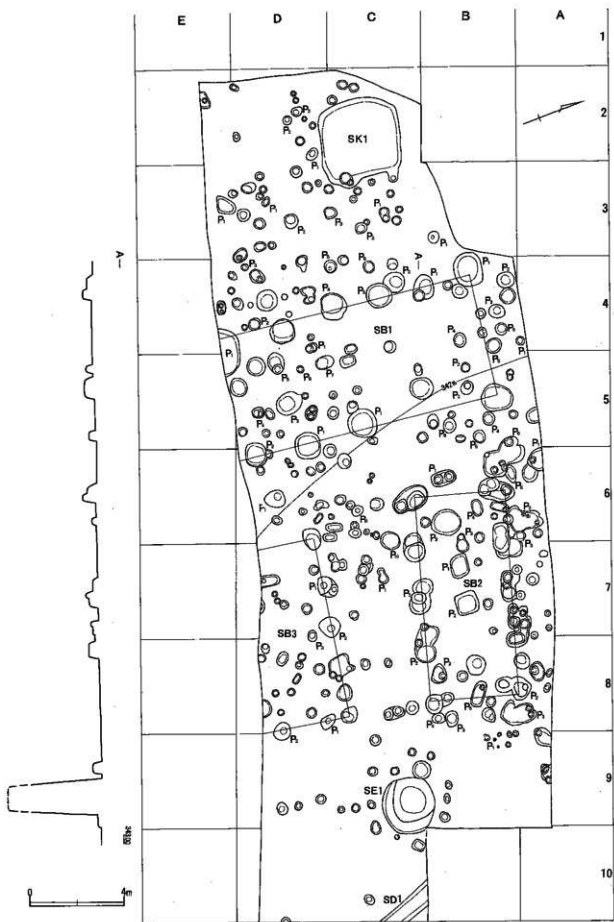


图11 I区道槽分布图(1:160)



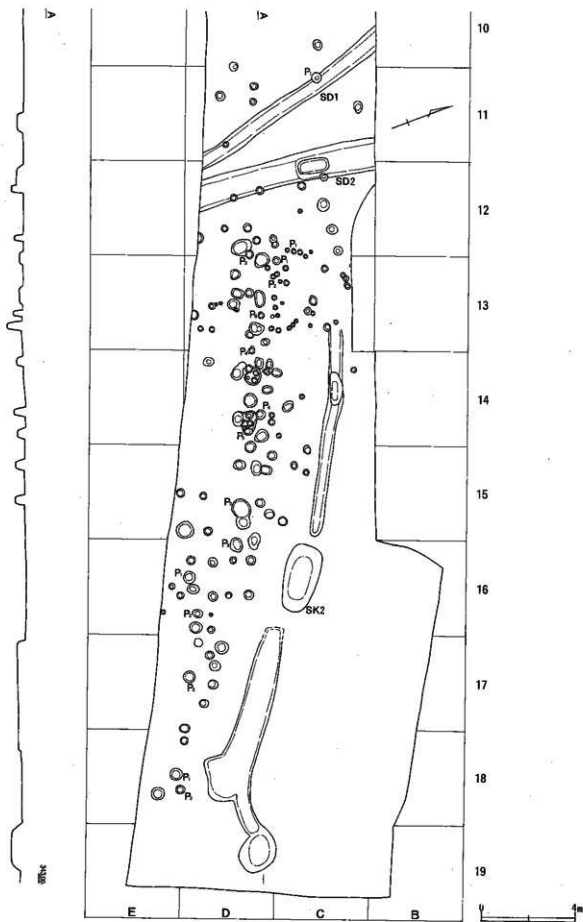


图12 I区遗物分布图2 (1:160)

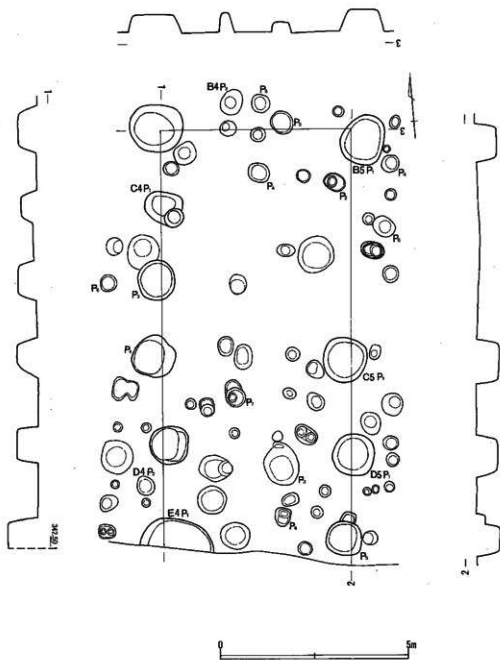


图13 I区1号掘立柱建物址 (I-SB1) (1:100)

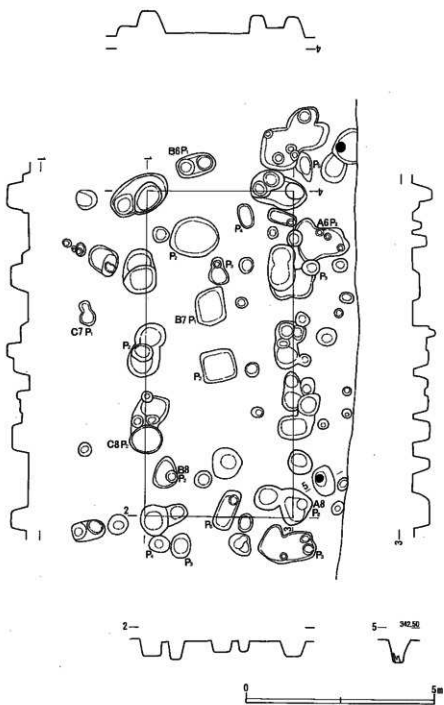


图14 I区2号掘立柱建物址 (I:S B 2) (1:100)

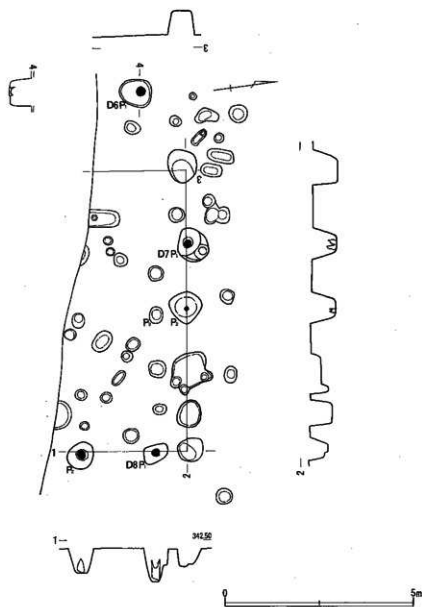


图15 I区3号掘立柱建物址(I-SB3)(1:100)

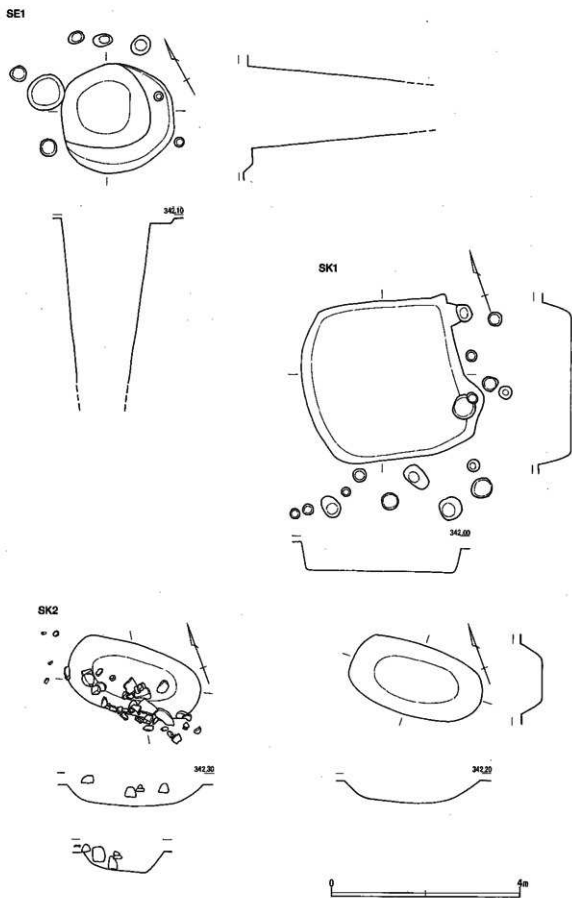


图16 I区1号井戸址(I-SE1)·1·2号土坑(I-SK1·2) (1:80)

SD1·2

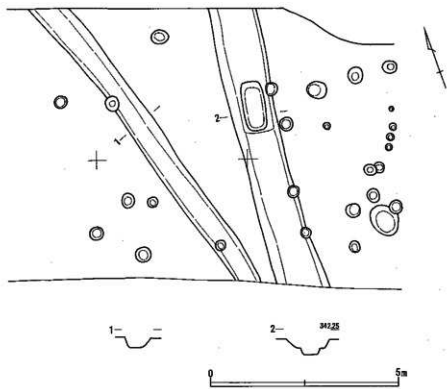


图17 I区1·2号溝址 (I-SD1·2) (1:100)

は瀬戸美濃陶器瓶(15)、肥前陶器皿(48)などが出土している。

本遺構の南北に溝状の遺構があり、あるいは本遺構と関連するのかもしれないが明らかにできなかった。

#### 1・2号溝址 (I - SD1・2) (図11・17)

C・D・11・12区に位置する。調査区では切りあい関係がわからなかったが、1号溝址は覆土が黒色土、2号溝址は黒褐色土で2号溝址が新しいものと考えられる。1号溝址からの遺物はなかった。2号井戸址からは肥前系陶器破片が出土している。

## 第2節 II区

II区は西側が急速に低地となる微高地にあり、水はけも良い場所であった。検出された遺構は、掘立柱建物址一棟のみである(図18)。この地区は遺物の出土は皆無であった。

#### 1号掘立柱建物址 (II - SB1) (図18・19)

4間×2間の建物で、柱間寸法は桁行2.5m、梁行1.8~2m、規模は10.5×3.9mである。総柱であり、周囲には庇が付属するものと考えられる。なお、東南側に柱穴が多く検出されており、この建物の一部となるか、あるいは付属建物と思われる。

また、建物内の北東側に井戸址が検出されている。1.8m前後のほぼ円形であり、上部はかなり開いているが中ほどより径90cm程の円形の掘り方となる。湧水があったことと、下部が狭小であったことから底までは検出できなかったが、深さ2mまで検出している。覆土下部より木製品(木材片)が検出されたが、小片であり図示し得なかった。

## 第3節 III区

II区の東方、市道1・210号線の東側である。黒色土が約150cm堆積しており、II区より現状は高位にあるが確認レベルではほとんど変わらない。確認された遺構は、掘立柱建物址1棟、井戸址3基、凹地状堅穴遺構1基である(図20)。

#### 1号掘立柱建物址 (III - SB1) (図20・21)

3間×2間の総柱建物で、柱間寸法は桁行2.5~3、梁行2.2~2.5mである。規模は8.2×4.7mを計る。

#### 1号井戸址 (III - SE1) (図20・22)

A・B・3区に位置する。2.7×2.3mの不整形円形を呈し、二段になっている。深さは50cmと浅いが、現在でも壁際からの出水があり、排水ポンプを使用しながら調査を実施した。出土遺物はない。

#### 2号井戸址 (III - SE2) (図20・22)

1号井戸址の南側、B・2区に位置している。規模は小さく、0.9×0.64mの楕円形を呈する。深さは54cmと浅いが、1号井戸址と同様に壁際からの出水がある。

#### 3号井戸址 (III - SE3) (図20・22)

1・2号井戸址に近接したB・3・4区に位置する。径1.3mの円形プランを呈し、深さは80cmを測る。出土遺物は、覆土中、確認面より5cm下位から珠洲系陶器が出土している。



图18 II区遗構分布图 (1:160)



SB1

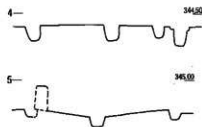
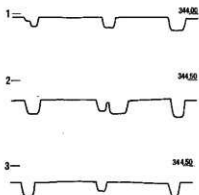
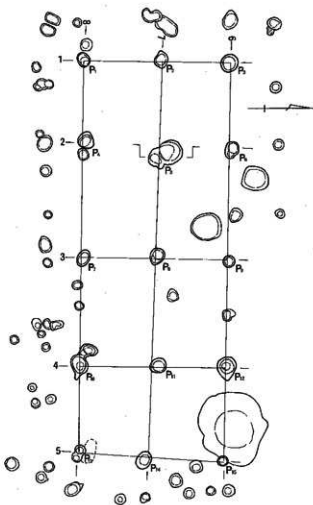
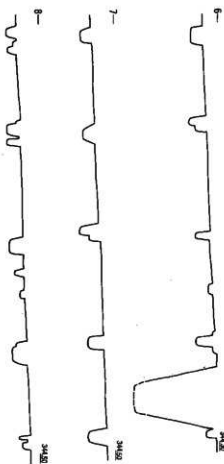


图19 II区1号掘立柱建物址 (II-SB1) (1:100)

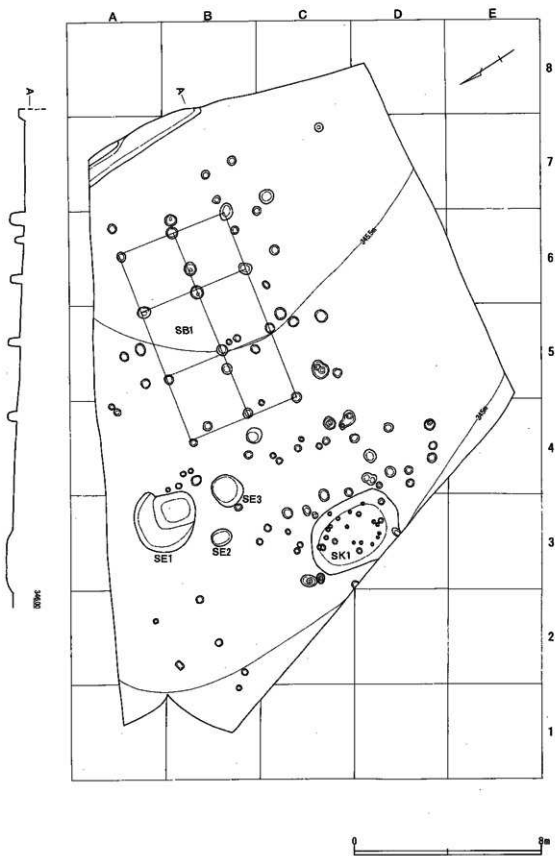


图20 III区遗構分布图 (1:160)

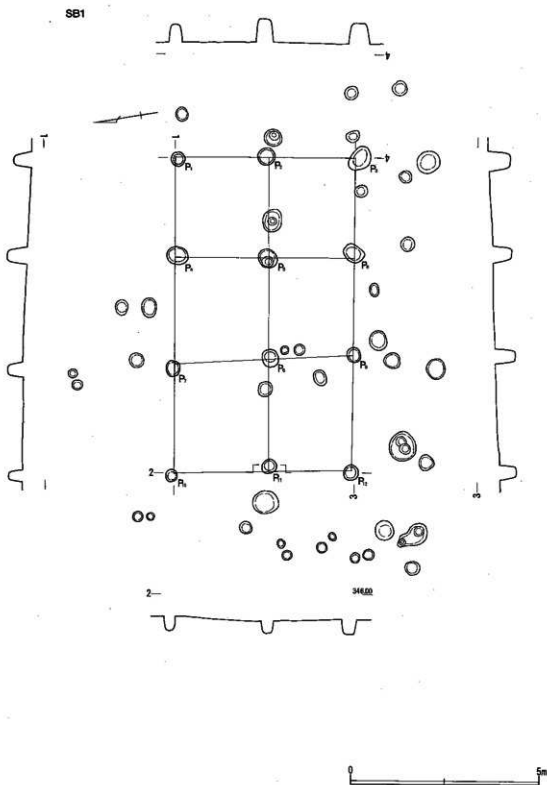
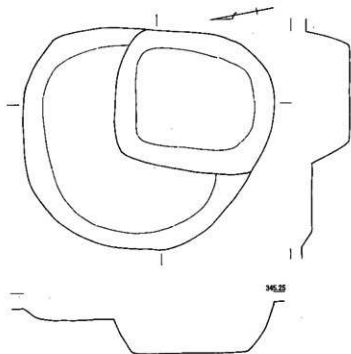
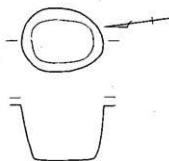


图21 III区1号掘立柱建物址(Ⅲ-SB1) (1:100)

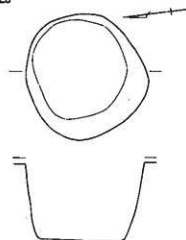
SE1



SE2



SE3



SK1

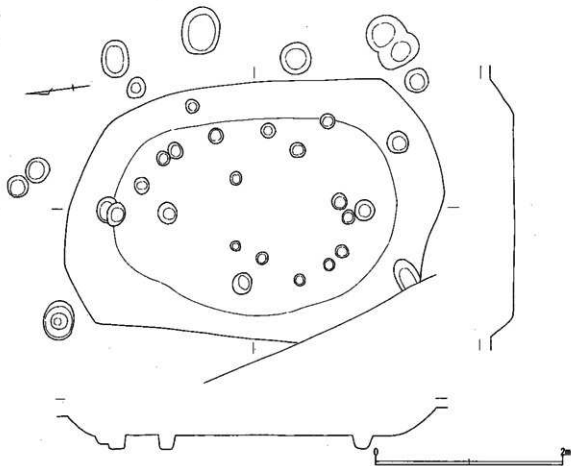


图22 Ⅲ区1·2·3号井戸址(Ⅲ-SE1·2·3)凹地伏壁竖穴遺構(Ⅲ-SK1)(1:40)

1～3号井戸址は深さなど規模からしても井戸址とするにはためらう部分もあったが、現在でも常時壁際から出水があり、およそ1時間もすれば確認面より20cm下位まで一杯になる状態であったため、貯水用の施設以外考えられないと判断した。

凹地状豎穴遺構（Ⅲ・SK1）（図20・22）

C・D・3区に位置する。4×2.6mの不整楕円形を呈する豎穴状の遺構である。深さは約20cmと浅く、壁も皿状になだらかである。坑底や壁に不規則にピットが認められるが、杭を打ち込んだと思われる径10cmときわめて小さなピットもある。

# 第4章 遺物

## 第1節 陶磁器

本稿では、出土した陶磁器を中国輸入磁器、国産陶磁器に大別し、さらに国産陶磁器は、瀬戸・美濃系陶磁器・肥前系陶磁器・珠洲系陶器のみに分けて記載している(図23~図26)。報告段階においては十分な作業を行っていないために、遺構別・器種別等の分類は今後実施したい。

### 1 中国磁器(図23・P L13)

僅かではあるが中世の輸入磁器が出土している。総数6点を数えるが、そのうち図示し得たのは2点である。他は写真で掲載した(P L13)。図示した1は白磁皿で、菊皿になるのかもしれない。釉は全体に施されるが、高台壘付は篋で切る。高台内には二重界線の中に天下太平を染付釉で書く。E-4ピット1出土。2は青磁碗である。胎土は灰白色を呈し、灰緑色の釉が施される。外面には線描蓮弁文が施される。SK1出土。P L13-3は青磁蓮弁文碗である。I区C-5ピット1出土。P L13-4は青磁碗で、色調からも図-2と同一個体と思われる。SK1の出土。写真-5は白磁の生掛け碗である。同じくSK1から出土している。P L13-6は染付皿で、内・外面ともに一重線が染め付けられる。SK1から出土している。

以上のうち、P L13-3は14世紀を中心とした年代、他は15世紀後半から16世紀代に比定されよう。

### 2 国産陶磁器

#### 1) 瀬戸・美濃系陶磁器(図23-3~17)

瀬戸・美濃系では、皿・向付・碗・瓶・水滴・搦鉢などがある。3・4は灰釉皿で、4は内面底部の釉がはがされている。5はややくすんだ濃緑色を呈する。SK1の出土。6は内湾する口縁で、削り高台、釉は内面と外面口縁部分のみに施される。7は緑色の銅緑釉が、8は黄釉が施される。6はSK1の出土である。9は鉄釉の小杯、10は灰志野釉皿であろう。削り高台である。SK1の出土。11は志野向付で、総掛けされる。12はいわゆる天目茶碗で、内面及び外面胴下半まで鉄釉が施される。高台は削り込みにより作り出される。13~15は鉄釉の瓶である。16は鉄釉搦鉢である。これらについては、小野正敏氏からご教示をいただいたるが詳細について触れることができなかった。これについては改めて稿を起こしたい。

#### 2) 肥前系陶磁器(図23-18~図25・93)

肥前系陶磁器は、本遺跡出土陶磁器の大半を占める。図化できるものは大半を図示したが、まったく同様なものについては時間的都合により1点で代表させた。

種別では皿・碗・搦鉢などがある。陶器皿では、重ね積み焼成において胎土目積みもの(24・25など)と砂目積みもの(26など)がある。

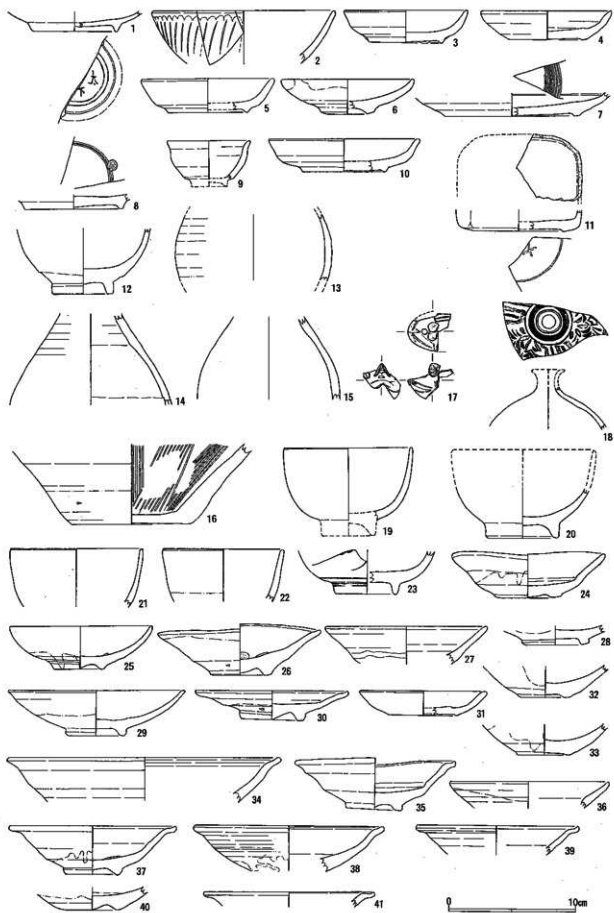


图23 出土陶磁器 1 (1:4)

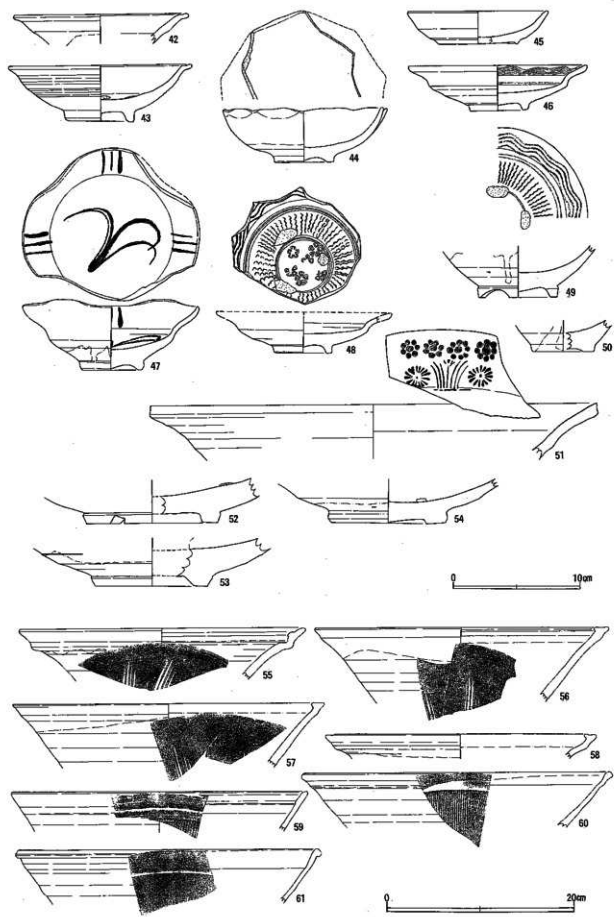


图24 出土陶磁器 2 (1:4)



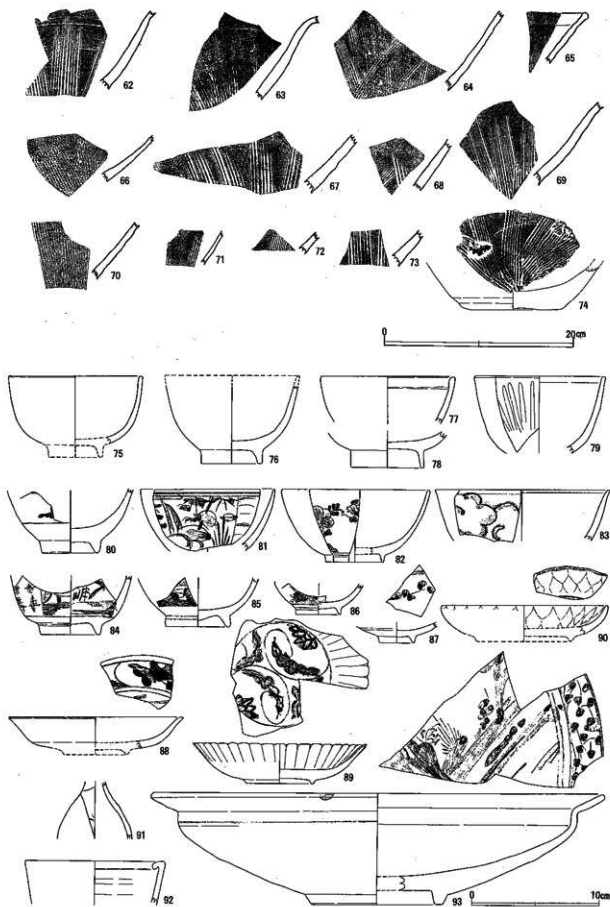


圖25 出土陶磁器 3 (1:4)

陶器では19から22の灰釉碗、23の青絵付の碗がある。46・48は白濁釉に刷毛目・すり絵文様をつけられる。いずれも砂目積み痕が4及び3認められる。47は小鉢で、黄灰色の釉に鉄釉絵付が施される。50は、皿で緑灰色の釉が掛けられ、内面折り返し口縁部に白色の絵付けがなされる。54から73は鉄釉播鉢である。口縁形態では、内面に隆帯をもつもの(54)、内側に突起するもの(55~57)、内側におりかえされるもの(58)、外側に折返されるもの(59・60)、この他図示し得なかったが54と逆に外反して、外側に隆帯を持つものなど多様な口縁形態がある。これらはいずれもロクロ成形で口縁周辺にのみ鉄釉を施す。底部は回転糸痕をとどめる(73)。また、胎土目痕も内外面にとどめている。

磁器では、白磁碗、染付碗・染付皿・染付瓶・青磁香炉・染付大皿などがある(74~92)。90は白磁釉に僅かに染付が認められる。

### 3) 珠洲系陶器 (図26・94~99)

I区及びⅢ区から僅かではあるが珠洲系陶器が出土している。出土総数8点で、図示しなかった2点はⅢ区から出土した片口鉢である。

94から98は甕である。94は唯一口縁形態がわかる資料で、肥厚することなく、くの字状に外反する。99は片口鉢で、内面に鋭利な撻菌原体を用いた卸し目が1単位15条入れられている。95はI区SK1、96・98はI区、94・97・99はⅢ区3号井戸址(SE3)の出土である。

I区出土の珠洲系陶器は、年代を確認できるような資料はない。I区出土の94の甕は口縁形態から明らかに古相を呈しており、珠洲系陶器編年に当てはめればⅡ期、13世紀前半に位置付けられる。また、Ⅲ区出土の片口鉢(99)は、卸し目の状況からⅣ期乃至Ⅴ期、14~15世紀に位置付けられるものと考えられ、I区よりもやや時期的には古いよううかがえる。

### 4) 内耳土器 (図26・100.101)

内耳鍋と言われているもので、I区より破片で十数点出土しているが、図示し得たのは2点のみである。100は、推定口径33.6cm、器高9.7cmを測る。101は内耳部分が欠失しているが、推定径35cmで、1とほぼ同様の法量と思われる。茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。表面には煤が多く付着している。内耳土器は時代が新しくなるにつれて器高が浅くなる傾向を示しており、15・16世紀の内耳土器の編年からすれば、その最も新しい時期、すなわち16世紀後半に編年されるものと思われる。

## 第2節 石製品・金属製品・木製品

### 1 石製品 (図27~29・図31-3)

石製品では、石製鉢、石臼、砥石、軽石、硯が出土している。図示した他にも石臼片は多く出土している。

- (1) 石製鉢 3点出土している(図27)。1は安山岩系の石質で、すり鉢である。内面に磨耗痕が認められる。全体の約1/3遺存。2および3は掲き臼である。多孔質の安山岩製で、外面は敲打により粗く仕上げている。すべてI区出土。2はSD1の出土である。

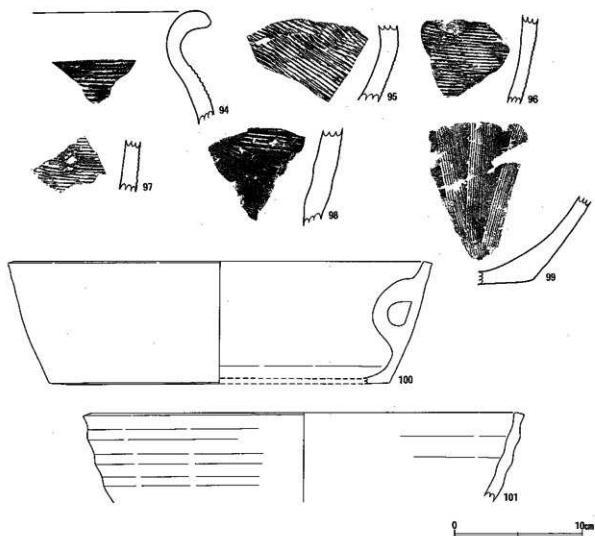


图26 出土陶磁器·土器 (1:4)

- (2) 石臼 4～6は石臼である。4は上臼で、遺存率は20%。裏面の溝は磨耗してほとんど残されていない。挽き手穴がある。5は下臼で、60%の遺存率。細密な溝で20数条認められ、6分画と思われる。6は上臼で、約25%の遺存率。裏面の溝はやはり磨耗していてほとんど残されていない。ものくぼりの窪みが認められる。
- (3) 砥石 (図29) 8点出土している。いずれも長方体を基本とするもので、かなり使い込んでいるものもある。本稿では、荒砥・中砥・仕上げ砥に分類しなかったが、大半が仕上げ砥だと思われる。なお、すべての砥石に線状痕が認められる。6のみⅢ区出土で、他はⅠ区出土。
- (4) 軽石 (図29-9) 1点のみ出土している。使用目的は不明だが、表・裏面ともに磨面が認められる。Ⅰ区B-4・P3出土。
- (5) 硯 (図31-3) 1点のみの出土である。粘板岩製の黒色の硯で、上・下端をそれぞれ欠く。裏面には「南无阿弥陀佛」と金属工具で線刻されている。また、表・裏面とも不規則な多くの線刻がなされている。「南无阿弥陀佛」との前後関係は、先に文字が書かれ、後に一部文字を消すような形で多くの線が引かれている。SB1のビット4内上部から出土している。

## 2 金属製品

金属製品は、釘類、飾り金具、小柄、竿秤等が出土している。鉄製品は低湿地にあったため錆の付着が著しく、原形がわからないものが多い。

- (1) 釘等鉄製品 (図30) 1～9は釘である。10は小柄の刀部分と思われる。11～14は鉄製品であるが名称は不明。13は飾り金具だと思われる。すべてⅠ区出土で、ビットからの出土が多い。
- (2) 銅製品 (図31・1.2) 1は棹秤のおもりで、重量は36.8g。中国の五権の重量と比較すると「両」が37.3gであることから、一部欠けている事も考慮すればほぼこれに一致する。Ⅰ区SK1から出土している。本例は、青森県浪岡城跡に出土例がある。2は小柄である。竹と思われる木の葉に小鳥が止まっている絵を打ち出しにより描き出している。同じくSK1から出土している。
- (3) 銅製容器 (図31・3) 推定口径38cmの大盤である。器高2.2cmで、最大器厚は口縁周辺で約3mmである。

## 3 木製品

Ⅰ区は低湿地であったために、柱痕を中心に多くの木製品が出土した。保存については、その施設がないために自然乾燥せざるを得なかった。そのために、いずれも変形してしまっている。

- (1) 板状木材片 (図32・1～3) いずれもⅠ区1号井戸址 (SE1) から出土したものである。

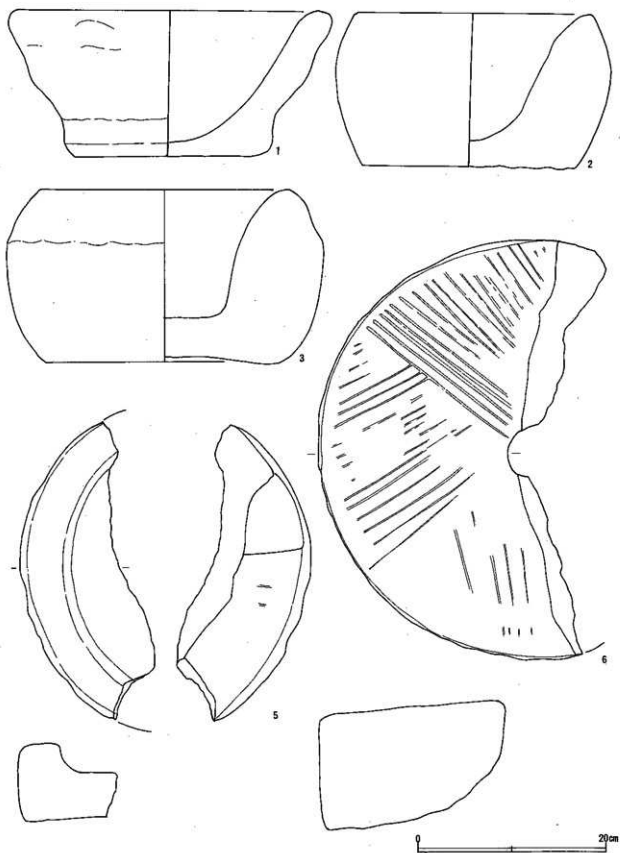


图27 出土石製品 1 (1:4)

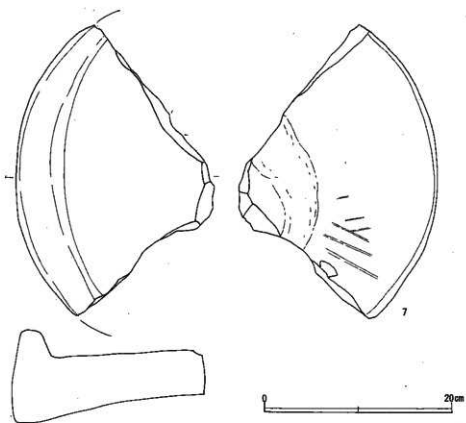


图28 出土石製品2 (1:4)

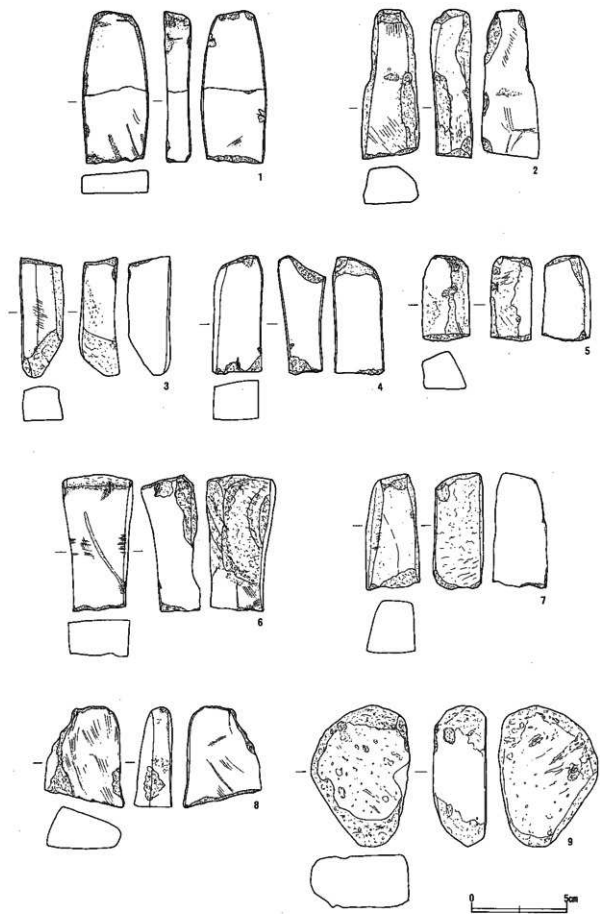


图29 出土石製品3 (1:4)

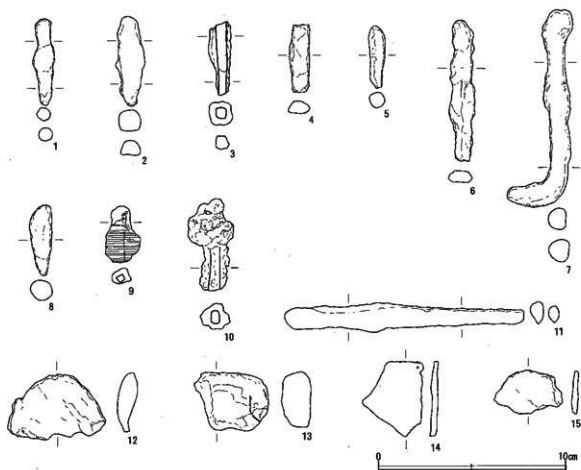


图30 出土金属製品1 鉄製品 (1:2)



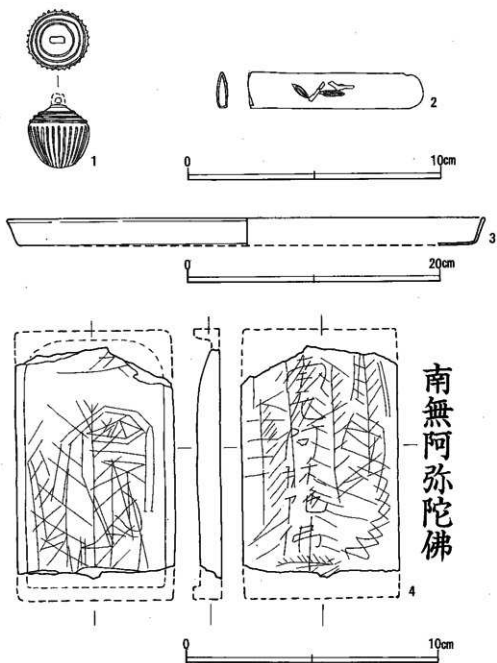
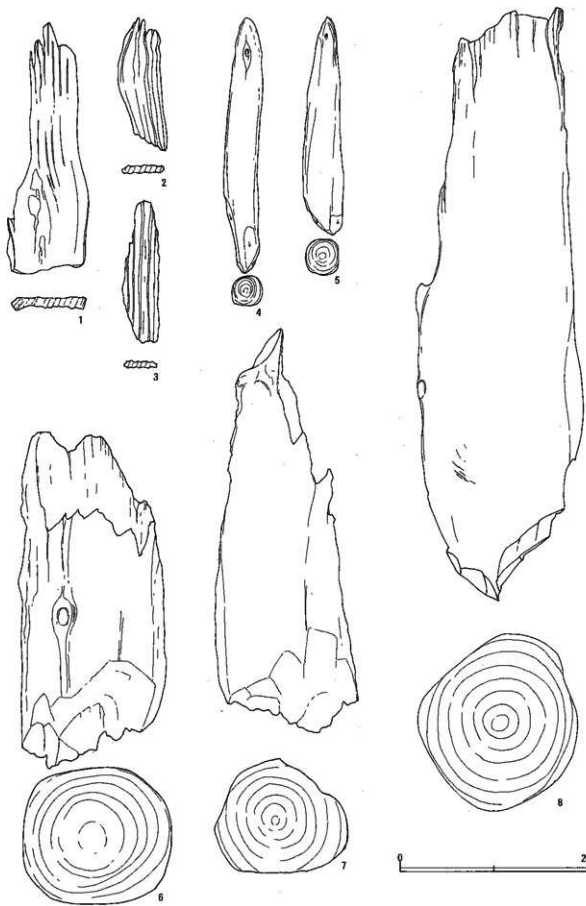


图31 出土金属製品2 銅製品 石製品4 (2:3·1:3·2:3)

断片であり、用途は不明である。この井戸からは表皮がついたままの広葉樹系自然木が大量に出土している。直径約10cmで、長さ1mから1.5mで、特別な加工痕は認められない。図示したもののみ加工されたものと判断できる。

- (2) 柱痕（図32-4～8） 柱穴内より出土したもので4・5は周囲が朽ちてしまっており、柱材とは思われないほど細くなっている。6～8もかなり朽ちてはいるが、直径20cm以上を計り、かなり太い柱であったことが伺える。すべて下端は鈍状の刃物でやや尖頭状に削られている。4は1区B-8ビット1、6はA-8ビット1、7はD-8ビット2、8はD-8ビット1の出土である。

なお、図示した以外にも各柱穴より多くの柱痕を検出した。保存施設がないために、日陰で自然乾燥により保管しようとしたが、試みは失敗し多くがひび割れ等変形してしまった。



番号	種類	器種	法量			釉薬	文様等	胎土色	産地	遺存	遺物番号
			口径	底径	器高						
1	磁器	皿		6.6		白磁	染付	白色	中国		I E4P1
2	磁器	碗	14.4			青磁	線蓮弁文	灰白色	中国		I SK1
3	陶器	皿	9.8	5.7	2.9	灰釉		灰色	瀬戸美濃	9/10	I
4	陶器	皿	10.2	6.2	2.3	灰釉		黑褐色	瀬戸美濃	9/10	I C4P2
5	陶器	皿	10.5	6.3	2.6	緑釉		暗灰色	瀬戸美濃	1/2	I SK I
6	陶器	皿	10.6	3.1	2.8	緑釉		灰色	瀬戸美濃	7/10	I SK I
7	陶器	皿		10.6		灰釉	見込沈線	灰白色	瀬戸美濃	1/4	I E3P1
8	陶器	皿		7.6		緑釉	見込沈線	灰白色	瀬戸美濃	1/6	I A6P2
9	陶器	碗	6.6			鉄釉		淡灰色	瀬戸美濃大窯I	1/5	I E4P1
10	陶器	皿	11.9	6.5	2.6			灰白色	瀬戸美濃	1/3	I SK 1
11	陶器	向付		7.1				灰白色	瀬戸美濃		I B5P1
12	陶器	碗		4.8		鉄釉		灰色	瀬戸美濃	1/5	I B5P1
13	陶器	瓶				鉄釉		淡灰色	瀬戸美濃	1/5	I B15P1
14	陶器	瓶				鉄釉		灰色	瀬戸美濃	1/10	I B4P1
15	陶器	瓶				鉄釉		灰色	瀬戸美濃		I SK1
16	陶器	搦鉢	9.4			鉄釉		淡灰色	瀬戸美濃	1/3	I C14
17	陶器	水滴					染付	淡灰色		1/5	I A7
18	陶器	瓶					赤・青染	淡灰色		1/4	I C4P5
19	陶器	碗	10.2			灰釉		灰白色	肥前	1/2	I B7P2
20	陶器	碗		5.4		灰釉		灰白色	肥前	1/3	I C9
21	陶器	碗	10.4			灰釉		灰白色	肥前	1/3	I D7
22	陶器	碗	9.6			灰釉		灰色	肥前	1/4	I A6P1
23	陶器	碗		4.7			絵付	淡灰色	肥前	1/3	I SE1
24	陶器	皿	12.1	3.9	3.6	灰釉		灰色	肥前	1/3	I C6+B4
25	陶器	皿	11.2	5.5	3.4	緑釉		淡灰色	肥前	4/5	I C14-1
26	陶器	皿	13.0	4.5	3.5	緑釉		淡灰色	肥前	9/10	I C6-10
27	陶器	皿	12.5					淡灰色	肥前	1/3	I D5P2
28	陶器	皿		4.3				茶褐色	肥前	1/4	I B7
29	陶器	皿	14.0	4.4	3.5	緑釉		淡灰色	肥前	4/5	I D9
30	陶器	皿	12.3	4.9	2.3	緑釉		灰色	肥前	1/3	I B7-2
31	陶器	皿	10.2	5.4	1.9			灰白色	肥前	3/5	I B8P5
32	陶器	皿		3.8				黄褐色	肥前		I A10
33	陶器	皿		4.1				〃	肥前		I SK1
34	陶器	皿	21.8						肥前		I SK 1
35	陶器	皿	12.8	4.3	4.0			淡黄色	肥前	3/5	I C 7 1
36	陶器	皿	12.6						肥前		I SK 2
37	陶器	皿	13.1	4.3	3.8			灰色	肥前	1/2	I B 7 3
38	陶器	皿	15.1						肥前		I C6P10.11
39	陶器	皿	13.0						肥前		I C 7
40	陶器	皿		4.0					肥前		I B 7
41	陶器	皿	13.6						肥前		I C 7
42	陶器	皿	13.9						肥前		I C 6
43	陶器	皿	14.6	5.2	4.4			茶白色	肥前	4/5	I C 6.9
44	陶器	皿	13.0	4.6	4.3			茶白色	肥前	2/5	

表3 出土陶磁器・土器観察表1

番号	種類	器種	法量			釉素	文樣等	胎十色	產地	遺存	遺物番号
			口径	底径	器高						
45	陶器	皿	11.2	6.2	2.6			灰白色	肥前		IC7.10
46	陶器	皿	14.2	4.3	3.6	灰白泥	三島手	灰白色	肥前	9/10	IC6.14
47	陶器	小鉢	14.1	4.5	5.5	灰釉	斑絵	淡黄褐色	肥前	4/5	IC11.14
48	陶器	皿		4.3			三島手	暗紫灰色	肥前		ISK1
49	陶器	皿		6.1				茶色	肥前		IB8P1
50	陶器	皿		4.8				茶色	肥前		IC13
51	陶器	皿	35.6			綠釉	染付	灰色	肥前		IC11
52	陶器	鉢		10.4				紫灰色	肥前		ID5P4
53	陶器	鉢		8.9				淡灰色	肥前		IE4P1
54	陶器	鉢		9.0				淡灰色	肥前		IE4P1
55	陶器	搦鉢	30.1			鉄釉		茶褐色	肥前		ID14P5
56	陶器	搦鉢	31.4			鉄釉		茶褐色	肥前		ISK2
57	陶器	搦鉢	33.0			鉄釉		茶褐色	肥前		ISK2
58	陶器	搦鉢	28.9			鉄釉		茶褐色	肥前		IC6・3
59	陶器	搦鉢	31.6			鉄釉		茶褐色	肥前		ISK2
60	陶器	搦鉢	33.2			鉄釉		茶褐色	肥前		ISK2
61	陶器	搦鉢	32.7			鉄釉		茶褐色	肥前		IB9P6
62	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		IC6
63	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		IC6・8
64	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		IC6
65	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		ISK2
66	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		ID5P2
67	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		ISK2
68	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		IB7
69	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		IC6・7
70	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		IC14
71	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		ISK1
72	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		IB7・2
73	陶器	搦鉢				鉄釉		茶褐色	肥前		IC7・2
74	陶器	搦鉢		9.0		鉄釉		茶褐色	肥前		IC4P5
75	磁器	碗	10.4					灰白色	肥前		IB8P5
76	磁器	碗		4.7				灰白色	肥前		IB7P2
77	磁器	碗	10.6					灰白色	肥前		IB7・2
78	磁器	碗		5.7				灰白色	肥前		ID7P2
79	磁器	碗	10.4			青磁	線蓮弁文	灰白色	肥前		IB7P2
80	磁器	碗		4.2			染付	灰白色	肥前	1/4	IC9P10
81	磁器	碗	10.6				染付	灰白色	肥前	1/4	IB7P1
82	磁器	碗	11.8	4.6	5.7		染付	灰白色	肥前		IB6P1
83	磁器	碗	13.6				染付	灰白色	肥前		IB5P4
84	磁器	碗		4.5			染付	灰白色	肥前	1/3	ID5P3
85	磁器	碗		5.0			染付	灰白色	肥前		IB6P1
86	磁器	碗		3.4			染付	灰白色	肥前		IA8P2
87	磁器	皿		2.7			染付	灰白色	肥前		IC5
88	磁器	皿	13.7				染付	灰白色	肥前		IC7・2
89	磁器	皿	13.8	5.3	3.1		染付	灰白色	肥前	1/3	ISK2

表4 出土陶磁器・土器観察表2

番号	種類	器種	法量			釉薬	文様等	胎土色	産地	遺存	遺物番号
			口径	底径	器高						
90	磁器	皿	13.2					灰白色	肥前		I SD1
91	磁器	皿					染付	灰白色	肥前		I C4P4
92	磁器	香炉	11.1			青磁		灰白色	肥前		I D7P1
93	磁器	皿	35.8	10.2	8.3		染付	暗灰色	肥前	1/4	I C6・11
94	陶器	甕						暗灰色	珠洲		Ⅲ SE3
95	陶器	甕						暗灰色	珠洲		I SK1
96	陶器	甕						暗灰色	珠洲		I D6
97	陶器	甕						暗灰色	珠洲		Ⅲ B2・2
98	陶器	甕						暗灰色	珠洲		I D7P1
99	陶器	片口鉢						暗灰色	珠洲		Ⅲ D5P4
100	土器	内耳鍋	33.6	24.0	9.7			暗褐色			I D5P4
101	土器	内耳鍋	35.0					暗褐色			I C6

表5 出土陶磁器・土器観察表3

## 第4章 成果と課題

調査対象地は長峰丘陵の西斜面にあたり、当初山麓地と考えていたが、実際に発掘調査を実施するとかなり複雑な地形・地質地帯であり、凹地と微高地とが入り組んでいることが判明した。Ⅰ区は湿地帯に近い平坦地で、東側のⅡ区との間は低湿地であった。土地の方よりかつて池があったと教示を受けたが、おそらく周囲が微高地でありここに集水したものであろう。Ⅱ区は微高地であったが、そのさらに東側のⅢ区は、黒色土が厚く堆積し、かつては凹地であったものと考えられる。

したがって、Ⅰ区～Ⅲ区はそれぞれ地形的に相違しており、厳密には同一遺跡として捉えられない地形環境を呈している。

また、調査にあたってはⅠ区から順次着手し完了していく予定であったが、天候不順もあり、地形要因から調査区内が一面ブルーのように水が溜まってしまい、幾日も水没した遺構面はかなり影響を受け、遺構が崩れたりしてしまった。そのため、調査地区を転々と移動したり、崩れて記録にとどめられない遺構もいくつかあった。

本稿では、そのような状況のため調査記録に不備な面があるが、遺構・遺物から明らかにできた部分および課題について整理しておくこととする。

### Ⅰ区

Ⅰ区で、遺構・遺物で注目されるものに1号土坑とした方形堅穴がある。堅穴遺構についてはいくつかの論考があるが、本稿では1基のみでありその機能論については触れることができないが、棹秤のおもりや小柄の出土については遺構の機能にも関わってくる重要な発見である。

出土遺物には、陶磁器・棹秤のおもり・小柄などがあり特殊な遺物も含まれている。陶磁器については、中国磁器・瀬戸美濃陶器・珠洲系陶器がある。中国磁器については、小破片であるが線蓮弁文などの文様により15世紀後半から16世紀代とした。また、瀬戸美濃陶器は、図23-6例のように大窯Ⅲ期に位置付けられるものあり、全体としては16世紀の後半から17世紀前半あたりにその主体があるものと思われる。

Ⅰ区内の他の出土遺物をみれば、中国陶磁などに若干古いものも存在するものの、瀬戸美濃陶器や肥前陶磁器などは、16世紀後半から17世紀にかけての年代が大半であり、その主体も17世紀はじめにおかれるものと考えられる。したがって、Ⅰ区の年代は若干古い時期のものもあるが戦国時代から近世の初めにかけての約100年間が主体と考えられる。

### Ⅱ区

Ⅱ区は、1棟の掘立柱建物址のみの発見であり、遺物の出土はなかった。したがって、時期的な判断は下せないが、Ⅰ区の遺構の状況などと比較すると内容ともに相違している。また、建物址の中に井戸址が確認され、これを建物の付属施設として考えた。類例については調査していないが、建物の規模からも近世初期の農家跡ではないかと推定される。

### Ⅲ区

Ⅲ区は、掘立柱建物址ならびに井戸址が確認されている。遺物は少ないが珠洲系陶器などが出土している。珠洲系陶器については、図26-94のように13世紀代に位置付けられるものがある。なお、図26-99は14-15世紀のものとして判断される。したがって、Ⅰ区よりは若

下古い年代に営まれたと考えられる。

以上、調査により知り得た一端について簡単に触れてきたが、Ⅰ区とⅡ・Ⅲ区については、遺構、出土遺物にも若干の差が認められた。Ⅰ区については、商業地の機能も備えた場所と考えられ、Ⅱ・Ⅲ区は農村の一部の可能性が認められる。時期的にはⅡ区については明確ではないが、Ⅲ区は遺物からもⅠ区よりも古いと予想される。

十分な整理作業を経ていないために詳細な分析ができなかったが、中世末から近世にかけての当該付近は歴史的にも重要な地域であり、今後とも鋭意究明していきたいと考えている。



## 第6章 ま と め

遺跡は、飯山市大字旭字西黒に所在する。昭和29（1954）年飯山市に合併するまでは、下水内郡柳原村南条であった。この南条という名称が、初めて古文書に登場するのは、「歴史的環境」の項で触れているように南北朝動乱期後半の室町時代初期であった。

ただ、初めて登場する古文書には、「水内郡常岩御牧南条内五ヶ村」とか「水内郡常岩南条内……」とあるように、常岩牧との深い関連を示す名称である。だとすれば、南条なる名称は「常岩牧」成立期までさかのぼるとみてよいであろう。

このような視点で、外様平南部に位置する柳原地区をみると、飯山地域で主要な平安時代の遺跡がいくつか存在することは注目に値しよう。南条遺跡の西端には、広井川が北東に向かって流れ、この広井川の西には小丘がある。この小丘の平沢面には、昭和53（1978）年圃場整備事業に伴い調査した北原遺跡が存在する。この北原遺跡は、平安時代の鍛冶炉址群が検出されたことで著名である。更に、この北原遺跡の北方には、別府原遺跡があり平安時代の集落址として知られている。「別府」という地名が残されていることも、柳原地区の歴史を知る上で、重要な意味をもっているものといえよう。

その他、鍛冶田遺跡、小佐原遺跡では平安時代の墓址が発見されている。中でも小佐原遺跡の墓址は、立派な木棺をつくって死者を埋葬しており、副葬品も当時としては貴重品であった陶器類が埋納されており、有力者の墓と考えられている。これらの遺跡は、いずれも9世紀後半から10世紀前半のものとしてされている。従って、これらの遺跡の存在からみて、柳原地区の本格的な開拓は平安時代前期から始まったものといえよう。そして、開拓の進行は、やがて常岩牧形成への重要な因子となったものであろう。

さて、南条遺跡の存在する付近一帯は、長峰丘陵の中でも珍しく、緩やかな傾斜を示しつつ外様平の低地へと移行している。この緩斜面では、今までにいくつかの小遺跡が発見されていたが、今回の調査区にあたる部分では、未発見であった。しかし、遺跡の存在する可能性が極めて高いことから試掘調査を行ったのである。その結果、遺構・遺物が発見され、本調査となったのである。

調査の結果は、第3章遺構、第4章遺物の所で詳細に記述されているとおり、飯山地域にとって初めての中世末から近世初期の遺構・遺物の発見となったのである。

今回の調査では、当初、予想もしなかった大きな成果があった。そして、今後私達が鋭意追求していかねばならない多くの課題を与えられることとなった。このことについては、第4章「成果と課題」で記述されているので、ここでは省略したいと思う。ただ、蛇足と知りつつ、若干感想を記してみたい。

今回の調査で、中国磁器、瀬戸美濃陶器、珠洲系陶器、備前系陶器など各地の陶磁器を受け入れ使用する段階まで、庶民が成長していたことは、当時の飯山地域の庶民生活を未える上で、重要な示唆を私達にあたえてくれたといえよう。

さらに、現在の正行寺の前身である勝願寺門前にあたるI区では、商業の機能を示す遺物が発見されており、南条地域が中世末～近世初頭にかけて、商業地として栄えた可能性を示している。そして、このことは、中世以降越後との人々の往来や物質交流が盛んに行われた富倉峠道の存在が、大きくかかわっていたことであろう。いうまでもなく、富倉峠道は、南

条地域を通っているのである。

今回の調査は、異常天候に悩まされた。調査区の湧水、暑熱との戦いの日々であった。このような悪コンディションの中、献身的に調査に協力された作業員の皆さんに心よりお礼申し上げます。

# PLATE





南條遺跡上空より北を望む



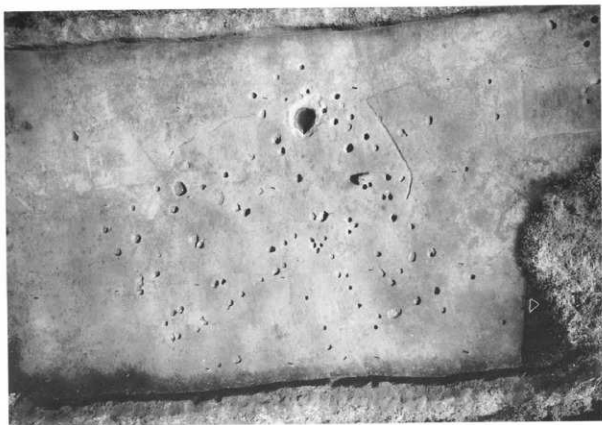
南條遺跡並びに山口城（矢印）



I 区遺構空中写真1



I 区遺構空中写真2



II区遺構空中写真



III区遺構空中写真2

I区 調査区近景



I区 調査状況



I区 調査風景





I区 1号井戸址  
(SD1)  
調査状況



I区 1号井戸址内  
樹木出土状況



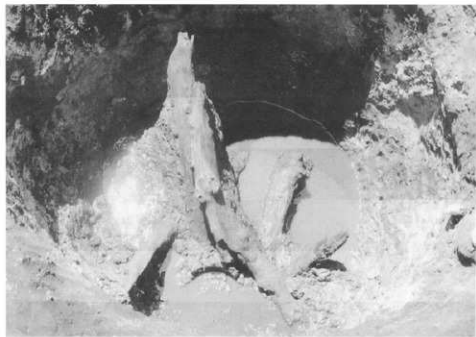
I区 1号井戸址



I区 1号土坑  
(1-SK1)



I区 2号土坑  
(1-SK2)



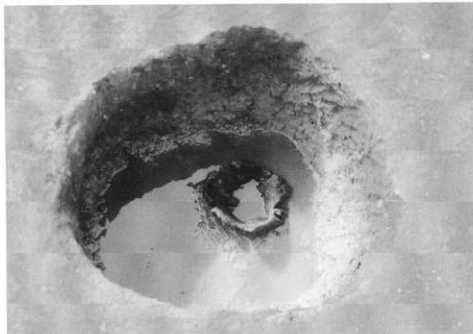
I区 1·2号薄状遺構  
(SD1·2)



I区 柱痕出土状况



I区 柱痕出土状况



I区 柱痕出土状况



I区 柱痕出土状況



I区 棹秤のおも  
り出土状況  
(SK1)

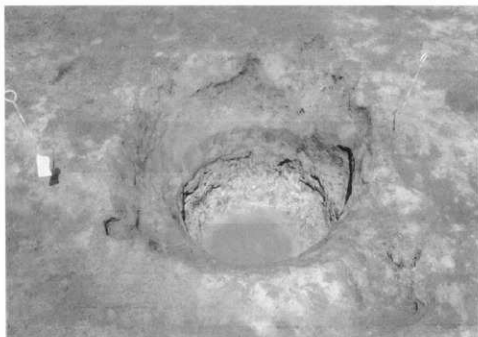




II区 作業風景



II区 全体写真



II区 1号掘立柱建物址内1号井戸址 (SE1)



II区 井戸址排水作業



Ⅲ区 全体写真



Ⅲ区 井戸址排水作業

Ⅲ区 1号井戸址  
(SE 1)



Ⅲ区 2号井戸址  
(SE 2)

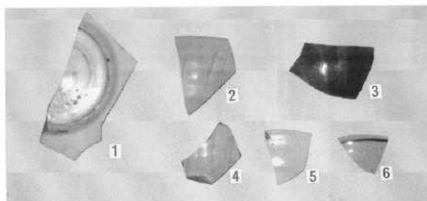


Ⅲ区 2号井戸址内  
珠洲系陶器  
出土状況





中国磁器



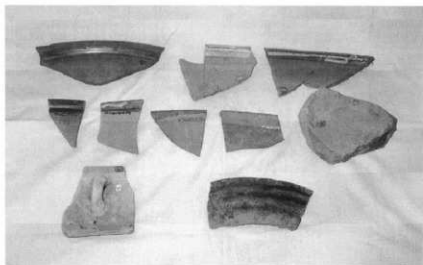
瀬戸・美濃陶器



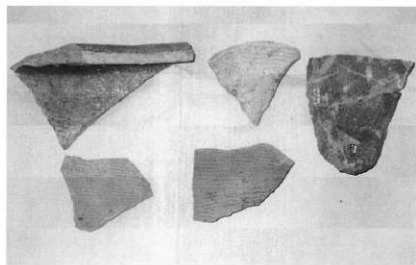
備前陶器



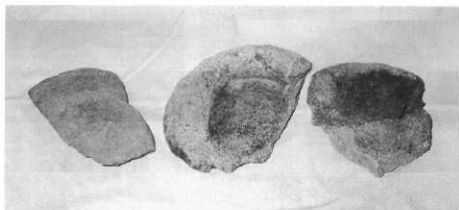
備前播鉢  
内耳土器

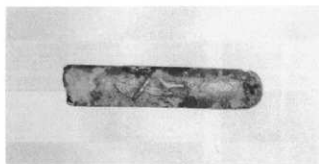


珠洲系陶器



石製品

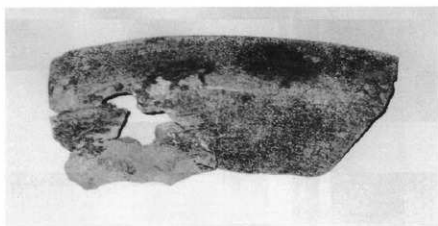




小柄



硯



銅製容器



棹秤のおもり



柱痕

飯山市現藏文化調査報告書 第62集

**南 條 遺 跡**

平成12年 3月15日発行

編集・発行者 長野県飯山市大字飯山11110-1  
飯山市教育委員会

印 刷 (株) 足立印刷所

